

文学館だより

令和 3 年 7 月 1 日
若山牧水記念文学館
TEL 0982 - 68 - 9511
文 責 日 高

いよいよ「国民文化祭・みやざき 2020 全国障害者芸術・文化祭みやざき大会」開幕です。107 日間にわたり県下一円、文化の華が咲き誇ります。3 日（土）開会式では坪谷小学校全校児童の「牧水のうた」が響き渡ります。会場中が感動の渦に包まれること間違いなしでしょう。牧水先生関連事業は私も参加したいものばかり。今からワクワクしています。

三浦家寄贈資料公開展 記者会見を行いました



那須文美会長あいさつ



橋口 寛理事経緯説明



学芸担当による概要説明



展示室案内

開催を 1 年見送ってきた『三浦展』。今年度に入り一般公開を始めたものの、セレモニーは 2 度にわたり延期。寄贈者ご本人、ご尽力賜った方々の出席も未だ叶わないままです。これほど貴重かつ大作の公開展開催を周知すべく、6 月 5 日（土）報道機関に集まいただきました。三浦敏夫の存在と二人の絆、敏夫亡きあとも大切に保管されてきた未公開資料の数々、未だ色褪せず愛され続ける牧水先生。必見のものばかりです。

公開にあたり、当館館長 伊藤一彦先生より挨拶文を、寄贈者三浦京子さんよりメッセージをいただきましたので紹介します。



この度の「三浦家寄贈資料公開展 繁と敏夫 受け継がれた二人の絆」は、若山牧水研究者および愛好者にとってまことに意義と価値ある企画展である。愛媛県今治市の岩城島の歌人である三浦敏夫を知る人は今日少なくなっているかも知れないが、若山繁すなわち牧水と深い交流があり、牧水の親友にして大なる支援者であった。その三浦家から牧水遺墨等を含め 391 点を若山牧水記念文学館に寄贈して下さったことは感激に堪えない。御遺族の三浦京子氏、前吉備路文学館長の遠藤堅三氏、文学企画学芸員の奥富紀子氏に心から御礼を申しあげたい。

牧水と敏夫の出会いは、牧水のエッセイ「島三題」（『樹木とその葉』所収）に詳しい。故郷の父が亡くなって、大正 2 年 5 月に牧水は上京するのであるが、船で上京の途次に瀬戸内海の岩城島の敏夫宅を訪ね、5 日間過ごすのである。三浦家は岩城島の本陣で、宏大な屋敷構えだった。その道路向かいの、海に面した別荘で、牧水は疲れを癒しつつ、在郷中の歌を清書するのである。東京で多少の金を作るためだった。ところが、自分が詠んだ歌なのに清書できなかった。「何だか恐しくて、とても平気でそんな歌を清書してゆく勇気がなくなってしまう。と云つて、心の底にはさうして作つてみた当時の或る自信が矢張り何処にか根を張つてゐた。そしてその自信は書かせようとする、故のない恐怖は書かせまいとする、その縫（もつ）れが甚しく私の心を弱らせた。」と牧水は書いている。その様子を見ていた敏夫は、代って清書しましょうと言って手伝ってくれたのである。そうして出来あがったのが破調の歌の多い第六歌集『みなかみ』である。このエピソードに牧水と敏夫の心温まる関係が象徴されている。敏夫は牧水と喜志子を生涯にわたって支援した。

私が念願の岩城島を訪れたのは平成 26 年である。地元の馬越健児氏が案内して下さったのだが、古びながら格調のある屋敷と庭園は今も眼前にある。

酒もたず来しと悔やみぬ牧水の霊のこりどらむ若葉の家に 歌集『遠音よし遠見よし』

若山牧水記念文学館 館長 伊藤 一彦

企画展開催に寄せて

この度は、三浦家寄贈資料公開展開催おめでとうございます。
牧水関連の品々を寄贈させて頂くことが出来ましたこと、厚く御礼申し上げます。
父敏夫についてでございますが、私の主人三浦正信（敏夫長男）は建設会社勤務でしたので、岩城島は父敏夫と母が二人で暮らしておりまして、昭和41年父死去までに私は2、3回の帰省で父に会ったようなことでございます。ですので父については正信の姉（東京都在住）の思い出話を書かせて頂きます。

『父は、豊かとは言えない家計の中、春夏秋冬の行事を子供たちと毎年必ず行ってくれたり、家族全員で永平寺へ旅行したことも懐かしい思い出の一つでございます。お酒をたしなみ、同人誌に短歌を投稿したり、お正月には牧水の短歌を吟じて家族に聞かせたり、優雅に過ごした日々でございました。』

昭和41年11月、父敏夫が死去しました。母は社宅で私たちと一緒に生活することになり、岩城島の家は無人になりました。この時に、敏夫が大切にしていた牧水関連の品々のすべてを狭い社宅に持ってきました。その後、転勤などで5回の転居。昭和57年、現在の家を新築し、ようやく牧水の掛軸などを、湿度など心配することなく保管することが出来るようになりました。それから、ほとんど押し入れの革張り木製の箱の中に眠っていましたが、春と秋には主人が愛好しておりました短歌を床の間に飾り誇らしく思いながら眺めていたことでございます。

そして、この国民的歌手の作品をどのようにしましたら世の中の方々に観ていただけるものかと思いつきながら、30年以上も月日がうち過ぎてしまいました。平成28年、主人正信の死去のあと、私自身、父の大切にしていた遺品を持っていることに責任を感じるようになりました。吉備路文学館前館長、遠藤堅三様にご相談の結果、牧水生誕の地へお願いするのがベストではないでしょうか、とのご助言を頂き、遠藤様のおはらかいで寄贈させて頂くことになりました。

今後の資料活用についての想いですが、牧水と敏夫の書簡（親しい友人との親密なやりとり）で、牧水の知られざる人柄の一面がさらに立体的に見えてくる一助となると嬉しい限りでございます。

令和3年4月11日

三浦京子

第1期 フロログ 敏夫の遺したもの 現在開催中 ~ 8月22日(日)まで延期
第2期 繁と敏夫 9月5日(日) ~ 12月5日(日)
第3期 敏夫と喜志子 令和4年3月13日(日) ~ 5月29日(日)

缶バッジを作りました どうぞ文学館にてお買い求めください



「ぼっくん缶バッジ」を作りました。
私たち職員は、牧水先生キャラクターを親しみを込めて「ぼっくん」と呼んでいます。
トートバッグに、筆箱に、ポーチにいかがですか。

1個 150円(税込) 直径 38mm

写真上段は坪谷の実写風景です。

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

トマトを水よりあげつ惶しく水拭きて噛むよこの冷えたるを
とまとを みずよりあげつ あわただしく みずふきてかむよ このひえたるを

大正13年に詠まれ、第15歌集『黒松』に収録されている1首です。
100年前と今と何ら変わらず、映像も、食感も想像できるのではと思っています。
ひとときでも涼しさが伝われば何よりです。

牧水先生は、他にもこんなトマトの歌も詠んでいます。

一枝に五つのトマトすずなりになりてとりどりに色づかむとす 『黒松』
舌に溶くるトマトーの色よ匂ひよとたべたべて更に飽かざりにけり 『黒松』